

■近況レポート

国内金相場 依然として高水準

銀相場は軟調な展開

ここ数年、この時期に原稿を書かせて頂いている。昨年も四月号にて金・銀相場の動向に触れ、その後一年を経過したが、国内金・

銀相場には特に方向性を大きく変えるような動きは見られていない(※作成した国内金・銀グラフは田中貴金属工業株式会社発表のデータを参考にしました)。

二〇〇六年以降の

海外金・銀相場と為替相場

■NY銀相場は

底値探りの展開

過去一年程の相場動向がどうだったかといっても、長期スパンでの動きを捉えておかなければならない。昨年の四月号で一九七三

年以降の動向に触れているので参考にしていただきたい。

今回は二〇〇六年以降、一二年間程のグラフを参考に話を進めてみたい。グラフ①はNY銀相場、グラフ②はNYの金相場に原油相場を絡めたもの、③と④は為替相場で、グラフ③はユーロ・ドル相場で、ユーロが何ドルか、グラフ④はドル・円相場で、ドルが何円であるかを示している。グラフ⑤は関連相場として米国株価(NYダウ)の動向を示した。

二〇一一年にかけてNY貴金属相場は大きな山を形成したが、二〇一〇年には出遅れていた銀相場が青天井となった。二〇〇八年に一オンス当たり一時一〇ドル(グラフでは一、〇〇〇セント)を割っていたNY銀相場

は上昇に転じ、二〇一一年四月末には四八ドル台にまで噴き上げた。ちょうど東京ではTICC(東京国際コイン・コンヴェンション)が開幕した時期で、関連した地金関連銘柄の販売価格が銀相場の値上りに追いつけない状況であったことが記憶に残る。

相場が急騰するときは、「そろそろ相場が下がる」と思って先物市場で売り上がった投資家がギブアップして買い戻すことになることが多い。その連続的な動きが相場をさらに押し上げることになる。絶対に下がらないと言われていた日本の土地神話も、バブルの崩壊で大きな下落を余儀なくされた。大衆小判や貿易銀が百万円にも達したコイン相場も一九七四年にピークアウトして大きな下落に

見舞われた経験もある。上がるときは急激だが、その咎めとしての価格修正は断続的ながら長期間に及ぶことが多い。

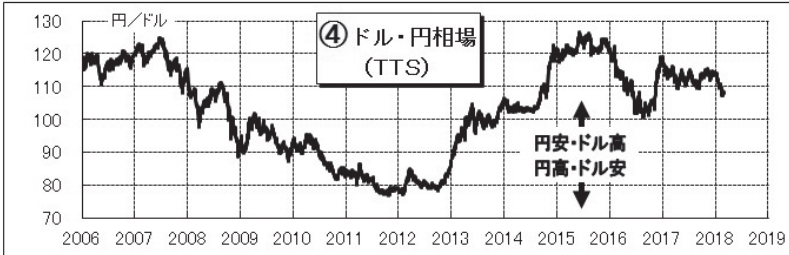
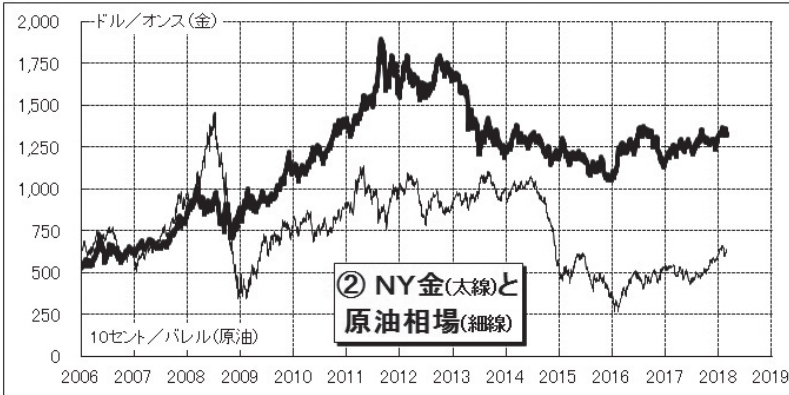
二〇一一年四月末の高値から二〇一五年二月末の安値までのNY銀相場は、四八・五八四ドルから一三・八〇三ドルまで三四・七八ドルの下落となり、その下落率は七二%に達した。高値から五年を経過した二〇一六年からは戻り売りから押し目買いに基調が変わってきた印象もある。二〇一六年のNY銀相場は一三ドル台から二〇ドル台回復となったが、その後は一五〜一八ドル水準が主流で比較的低水準での動向が続いている。現在は二〇一六年の安値を維持しているものの、安定的に上昇する環境とは言えない。長期的には底値探りの状態が続いていると言えそうだ。

■NY金相場は

比較的シツカリ

NY銀相場に遅れること約四ヶ月、NY金相場は二〇一一年九月二日にグラフ内の高値一オンス

2006年以降のNY金・銀・原油相場と為替相場の推移



一、八七六・九ドルを記録した。反落後の安値を付けたのは二〇一六年一月一六日の一、〇四九・六ドル、この間の下落率は四四%で、銀の七二%に比べ極端に小さい。金の安定性は過去の相場でも証明されているが、逆に他の貴金属属地(金(銀やプラチナなど)はマーケット

トの規模などの関係などから、投機の対象になりやすく値動きが荒いことがあげられるのかもしれない。その金相場は、二〇一六年には一、〇〇〇ドル割れを回避し、同年夏には一、三六〇ドル付近まで回復した。年末にかけては一、

一三〇ドル前後まで下落したが、二〇一七年は安値から反発してジリ高傾向となった。一二月には一時一、二五〇ドルを割ったものの今年二月中旬には一、三五八ドルまで回復し、二〇一四年三月中旬以来二年一ヶ月ぶりの高値を記録した。その後は二月末にかけて

一、三二〇ドルを割り小緩んだ。金相場の上記の値動きについてその材料を付記していないが、なかなか金相場を動かす材料を特定することは難しい。相場が上がったとか下がったとかの材料は、後から付けるといふ専門家もいる。とは言っても、金相場に与える材